

ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向の個人差とそれに関わる要因の検討

山口将典

論文要旨

ヒトが世界をどのように捉えているのか、それが発達とともにどのように変化するのは、発達心理学における大きな問いのひとつである。特に、子どもがいつ頃からどのように生物と無生物とを区別するのか、子どもがいつ頃から何に対して心的状態を見いだすのかといった問いはよく議論されている。一般的に、知覚状態や心的状態といった内的状態を有するのは生物のみであると考えられるが、興味深いことにヒトは無生物にまで内的状態を知覚することが知られている。このように、無生物に対して内的状態を知覚する傾向には個人差が存在することが知られており、特に社会心理学や宗教認知科学を中心として、この個人差を説明する要因が議論されてきた。しかし、発達がここにどのように関わっているのかはほとんど議論されてこなかった。

本論文では、ぬいぐるみや人形といった無生物対象を取り上げ、無生物に対する内的状態の知覚傾向における個人差がどのように発達し、その過程で個人差がどのように現れるのか、そこにはどのような要因が関わっているのか、について実証的に明らかにすることを目的とした。本論文は全7章から構成された。

第1章では、本論文の主題である無生物に対する内的状態の知覚がどのようなものを定義し、これが単なるふりとは区別されること、また必ずしも生物と無生物の区別に依存するわけではないことを論じた。そしてこれを明らかにすることには、学術的な意義ばかりでなく、実践的な意義も存在することを示唆した。

第1章の後半では、大型類人猿を対象とした知見を概観し、無生物に対する内的状態の知覚に関わる進化的基盤について議論した。近年、大型類人猿にも心的状態を理解する能力が見られる可能性が議論されているものの、無生物に対して内的状態を知覚する心的特性はヒト特有なものである点を示した。また、その発達においては、生後初期から心的表象を他者と共有するヒト特有の養育環境が関与する可能性を指摘した。

第2章では、ヒトは無生物に対してどのように内的状態を知覚し始めるのか、その発達過程について概観した。無生物を、自己推進的に動くか、動物らしい形態学的特徴を有するか、という2軸で4つの象限に分け、それぞれについて先行研究の知見を概観した。その結果、いずれの象限でも、無生物に内的状態を知覚する心的機能が生後2歳頃から見られること、そして、自己推進的に動かず、動物のような形態学的特徴を有する無生物(ぬいぐるみや人形)に内的状態を知覚する心的機能の現れには、3歳頃から個人差が見られることを示した。

第2章後半では、無生物に対する内的状態の知覚が加齢とともにどのように変化するかを検討するため、魔術的思考に関する知見や比較文化心理学研究の知見を概観した。魔術

的思考に関する知見によれば、ある事物や現象に対する非科学的な説明や信念は、成人になっても完全に消失することなく、科学的説明や信念と共存することが示されていた。また比較文化心理学研究においては、ある事物に対する理解が文化によって異なることを強調しており、これはその文化で共有された知識や信念、経験と密接に関連することが示唆されていた。これらの知見は、ある事物に対する理解が加齢とともに必ずしも科学的理解へと収斂するわけではないことを示唆しており、無生物に対する内的状態の知覚についても、成人期にまで維持されている可能性を指摘した。

第3章では、幼児期までに無生物に対する内的状態の知覚傾向に個人差が見られることに着目し、この個人差がどのような要因と関連しているのかを検討した。本章前半では、先行研究の知見を概観し、無生物に対する内的状態の知覚が、エージェンシー検出装置や心の理論といった概念的システムによって支えられる多段的なプロセスによって成し遂げられている可能性を指摘した。そして、社会心理学の知見によれば、対象となる無生物に関してその個人が有する知識や、エフェクタンス動機、社会的つながりに対する動機がこのプロセスに影響を与える重要な要因であると考えられていたが、これらに加え、内的状態が外部から直接観察しにくいという点から、他者の証言も重要な要因である可能性を指摘した。

第3章後半では、子どもの無生物に対する内的状態の知覚傾向が上記要因によって説明されるのかを検討するため、無生物に対する内的状態の知覚と概念的に重なりが大きいと考えられる空想の友達に関する知見に注目した。そして、社会的つながりに対する動機の関与については先行研究間で結果が一貫していないこと、他者の証言に関してはほとんど研究されていないことを指摘した。こうした議論を踏まえて、本研究で検討すべき課題についてまとめ、本論文の構成を示した。

第4章では、加齢に伴ってぬいぐるみや人形の扱い方がどのように変化するのかを検討した。本章前半では、この問題を検討するうえで愛着物体研究が参考になることを指摘し、愛着物体が何を指しているのか、そして先行研究ではどのような発達的変化が想定されているのかをまとめた。愛着物体研究でも、2歳頃からぬいぐるみや人形に感情を投影したり、話しかけたり、人格を付与するなど、内的状態を知覚しているかのような行為が見られることが指摘されていたが、加齢に伴ってどのように変化するのかは十分に明らかではなかった。さらに、2歳頃からぬいぐるみや人形を擬人的に扱うことについては、空想の友達研究でも指摘されているが、愛着物体と空想の友達の低位概念である人格化された物体との関係性や概念的な位置づけは整理されていなかった。

第4章後半では、0歳から9歳の子どもを持つ養育者700名を対象として質問紙調査を実施し、子どもがぬいぐるみや人形をどのように扱っているのか、それが加齢とともにどのように変化するのかを実証的に検討した。さらに、これまで検討されてこなかった愛着物体と人格化された物体概念との関係性を検討した。その結果、ぬいぐるみや人形を擬人的に扱う行為の頻度は1歳以降徐々に増加し、4歳から6、7歳頃にピークを迎え、その後減少に転じるという逆U字曲線を描くことが示された。また、ぬいぐるみや人形の扱い方には大

きな個人差が存在することを指摘した。さらに愛着物体と人格化された物体とがかなり重なるの大きな概念であることを指摘した。これらの結果から、ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する傾向は、学齢期以降減少に転じる可能性があることを示した。

第5章では、子ども自身がぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚しているのかを直接検討し、さらにここに個人差が見られるのか、その個人差がどのような要因と関連しているのかを検討するため、4歳から6歳の幼児を対象として実験を行なった。具体的には、社会的つながりに対する動機づけを実験的にプライミングし、幼児のぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向（生物学的、認知的、知覚的性質を付与する傾向）が変化するのかを検討するとともに、養育者がぬいぐるみや人形に内的状態を知覚する傾向が幼児のそれと相関するのかを検討した。その結果、社会的つながりに対する動機づけは、ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向に影響しなかった。一方、養育者がぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する傾向および自由遊び中にぬいぐるみや人形に認知的性質を付与する頻度が、幼児がぬいぐるみや人形に認知的性質を付与する傾向と相関することが示された。この関連は、子どもの月齢や養育者の年齢、子どもが自由遊び中にどれくらいぬいぐるみや人形に対して内的状態を付与するような発話を行なったかを統制しても有意に相関した。これらの結果から、幼児がぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する傾向は、養育者との会話を通じて獲得されている可能性を示した。

第6章では、ぬいぐるみや人形に対して内的状態と知覚する傾向が、成人期にまで維持されているのかを検討した。本章前半では、空想の友達の下位概念である人格化された物体がぬいぐるみや人形に内的状態を知覚しているかのように見えることから、成人がこれをどのくらいの割合で有するのかを先行研究の知見を概観し、人格化された物体を有する成人の割合はほとんど検討されてこなかったことを指摘した。

第6章後半では、大学生および成人を対象として質問紙調査を実施し（調査1および調査2）、これまで明らかにされていなかった成人期における空想の友達の保有率を明らかにするとともに、ぬいぐるみや人形に対する擬人化傾向に個人差が存在するのか、そしてこの個人差がどのような要因と関連しているのかを実証的に検討した。その結果、およそ8から13%の成人が人格化された物体を有していることを明らかにし、ぬいぐるみや人形に内的状態を知覚する傾向には個人差があることを示した。さらに、この個人差が空想の友達の履歴（例えばぬいぐるみや人形に人格を付与して扱ったことがあるか、現在もそのように扱っているかなど）と関連することを示した。知覚されたストレスもこの個人差と関連したものの、その効果はきわめて小さく、また孤独感はこの個人差とほとんど関連しなかった。この結果から、ぬいぐるみや人形を擬人的に扱う行為や、内的状態を知覚する傾向は、成人期でも維持されること、さらに過去にぬいぐるみや人形を擬人化して扱った個人はぬいぐるみや人形に内的状態を知覚する傾向にあったことから、経験が重要である可能性を示した。

第7章では、本研究で得られた研究成果を踏まえて、ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向の個人差がどのように生まれ、加齢とともにどのように変化するのかを総括し

た。本研究成果で特に重要な点は、(1) 2歳頃からぬいぐるみに対して内的状態を知覚するようになり、この傾向は幼児期から学齢期にかけて減少していくものの、成人期においても完全に消失するわけではなく維持されていること、(2) 幼児期におけるぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向には、養育者をはじめとする周囲の他者の証言が関わっており、周囲の他者との会話などを通じてぬいぐるみや人形にも内的状態が存在するという知識を形成している可能性があること、そして、(3) 幼児期に形成された知識は、成人期にまで少なくとも一部は維持されており、成人期におけるぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚に関わっていること、を明らかにした点である。これらの結果は、無生物に対する内的状態の知覚を検討するうえで発達的な視点が欠かせないこと、さらに、ある事物に対する理解が一様のゴールに向かって進んでいくことを前提とし、その発達を記述することに限界があることを示唆している。ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向が幼児期から学齢期にかけて減少する可能性があることについて、生物学的知識の獲得の影響があることを指摘し、学齢期以降もぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚する個人は、こうした知識と拮抗・矛盾しないような説明を生み出している可能性について考察した。

以上のように本研究では、ぬいぐるみや人形に対する内的状態の知覚傾向に幼児期から個人差が見られることを明示的に示すと同時に、この個人差が養育者をはじめとする周囲の他者との会話と密接に関連している可能性があること、そしてぬいぐるみや人形に内的状態を知覚する傾向は成人期にまで維持されていることを実証的に示すことができた。今後は、ぬいぐるみや人形に対して内的状態を知覚することがどのような信念、神経学的基盤によって支えられているのかを検討することを通じて、これを可能にしているプロセスを理解していく必要がある。